

外来魚駆除ツアーに対する観光客の評価

—奄美大島のコイ駆除に着目して—

環境資源学専攻 森林・緑地管理学講座 森林政策学 豆野 皓太

1. はじめに

Nature-based Tourism は、自然保全と地域経済の活性化を両立することが出来ることから、世界中で行われている(Boo 1990)。このような Nature-based Tourism の中でも、近年増加しており注目されているが、Volunteer Tourism(以下 VT とする)である(UNEP 1998)。VT とは、休暇を使い、自然保全のためにボランティア活動を行う観光の体系である。VT は、多くの資金や人員を長期間要する外来種管理においても期待されている(Coghlan et al. 2011)。

本研究の事例地である奄美大島においても、VT に対する期待は大きいと考えられる。奄美大島では、河川生態系の保全のため市町村が主体となり、コイなどの外来魚の駆除を実施している。しかし、関係者だけの作業に限界を感じており、市民の協力を必要としている。このような状況と、奄美大島が生物多様性の豊かさから観光地として注目されていることを踏まえると、VT に対する期待は大きいと考えられる。しかし、奄美大島において外来種駆除を組み込んだ VT に対して、観光客の需要があるのかについては、明らかにされていない。

本研究の目的は、外来魚駆除を Nature-based Tourism に組み込んだ際、外来魚駆除はツアーオプションとして、観光客に評価されるのかを明らかにすることである。

2. 方法

奄美大島に観光を目的で訪れた旅行者を対象にアンケート調査を実施した。質問紙は、2017年8月27日から31日に鹿児島県奄美大島の奄美空港搭乗待合室で924部配布し、郵送で回収した。本調査では、レクリエーションとしてのコイ捕りと外来魚駆除としてのコイ捕り(VT としてのコイ捕り)への評価を区別するため、サンプルを2つに分けた。つまり、一方にはコイ捕りは外来種管理という側面も持つことを明記し(以下、説明グループ)、他方には、このような情報は記載しなかった(以下、非説明グループ)。その上、選択型実験を用いて、回答者にカヌーツアーの時間や金額、コイ捕りオプションの追加(以下、コイ捕り)などについて内容の異なるカヌーツアー案を提示した。回答者には、2つの異なるカヌーツアー案とツアーに参加しないという3つの選択肢から最も参加したいツアー(または参加しない)を選択してもらい、5回回答してもらった。分析には、選好の多様性を考慮に入れ、潜在クラスモデルを用いてコイ捕りに対する支払意志額(以下 WTP とする)を推定した。

3. 結果と考察

343部の質問紙を回収できた。このうち有効な回答が得られた331部の回答を分析に用いた。コイ捕りに関して、説明グループでは、60.1%の回答者が、非説明グループでは、19.7%の回答者が望ましいと考えており、両者には有意な差があった(t-test; $p < 0.001$)。モデル推定の結果、コイ捕りに関して、非説明グループでは WTP が -674 円であった一方で、説明グループでは WTP が 1359 円であった。また、コイ捕りに対して、選好の多様性が見られる事もわかった。非説明グループの WTP が負であることから、コイ捕り自体が、レクリエーションとして評価される事はなく、コイ捕りのオプションを追加することでツアーへの WTP が下がることがわかった。一方、説明グループでは、外来種管理としてのコイ捕りは観光客に評価されており、VT として外来種管理への協力を得られる可能性が示された。